

平成29年度第1回南部地域政策総合会議 会議録 概要

1 開催日時

平成29年9月5日（火）午後2時から午後4時16分

2 会場

徳島県南部総合県民局 阿南庁舎 大会議室

3 出席者

(1) 政策総合会議委員 17名（3名欠席）

① 地域住民代表委員 16名

青木委員 石本委員 大城委員 加藤委員 兼松委員 栗田委員 小林委員 酒井委員
轟委員 中川委員 永原委員 橋本委員 濱崎委員 林委員 平井委員 町田委員

② 県委員 1名

森南部総合県民局長

(2) 評価部会委員 1名

石田部会長

(3) 管内市町長 5名

岩浅阿南市長 峯田那賀町副町長 福井牟岐町長 影治美波町長 前田海陽町長

4 会議次第

(1) 開会

(2) 議事

①平成28年度の「徳島県南部圏域振興計画」の実施状況について

②平成28年度の「南部圏域課題解決プラン」の評価について

③平成29年度の「徳島県南部圏域振興計画」の取組みについて

④「徳島県南部圏域振興計画」及び「南部圏域課題解決プラン」の変更案について

(3) 意見交換

(4) 閉会

5 配付資料

- ・ 徳島県南部地域政策総合会議設置要綱
- ・ 徳島県南部地域政策総合会議委員名簿
- ・ 平成29年度第1回徳島県南部地域政策総合会議配席図
- ・ 資料 1 平成28年度南部圏域課題解決プラン実施結果及び評価（概要）
- ・ 資料 2 平成29年度徳島県南部地域政策総合会議 計画推進評価部会報告
- ・ 資料 3 平成29年度の「徳島県南部圏域振興計画」の取組み
- ・ 資料 4 徳島県南部圏域振興計画（案）
- ・ 資料 5 南部圏域課題解決プラン（案）

<発言概要>

(A委員)

例のごとく1番バッターでございます。Aでございます。よろしくお願いいたします。

私は今日は、県南に住む者としての意見を2点述べたいと考えております。いつもは、専門の高齢者福祉であったり、防災関係を述べさせていただいてるんですけど、今日は、あえて趣向を変えて、一県民目線でお話をさせていただきます。2点ございます。

まず1点目は、2020年の東京オリンピックまでに導入を目指している世界初の、デュアル・モード・ビークルについてお伺いしたいと思います。やはり県南地域の活性化に繋げ、また、観光に繋がりたいと考えている、このデュアル・モード・ビークルの、いろんなPRとかイベントを多分今、打たれていると思います。情報によると、今壊れているというふうな報道等もあったかと思いますが、現段階での今後のスケジュールをお伺いしたいのと、県南部で、独自にこのDMVをもっと売り出すためには、今の若い世代から言いますと、やはりSNS、Youtube、ホームページ等を作って、広く取組む必要があるんじゃないかなと思っております。それと同時に、やはりデュアル・モード・ビークルは、鉄道マニア等には、非常に人気があるというふうに、鉄道雑誌やいろんなものをちらっと拝見すると、いい印象が与えられていると思いますので、もう少しマニア向けな、何か戦略を取るのも一つの方向性じゃないかなと考えております。そのためには、DMVを活用するような、何か部会を立ち上げていただいて、継続的に、こうした方がいい、ああした方がいいというPR戦略、観光戦略を打っていくべき時期がそろそろ来ているんじゃないかと思っておりますので、ご検討をよろしくお願いいたします。

2点目は、「あと3年と9ヶ月で始まります」と言えば、先ほども計画の中で追加指標のところにもありました「ワールドマスターズゲームズ2021関西」が、あと3年と9ヶ月で始まります。県南部では、トライアスロンの美波町さん、カヌー的那賀町さん等がやはり注目を浴びられると思います。先ほどの修正の中にもありましたが、宿泊等の需要が非常に望まれると。宿泊等の推進、先ほど計画の中でも謳っていました。この少子高齢化の中、交流人口を得るための非常に大きなビックイベントだと捉えておりますので、ぜひとも、その辺の体制をしっかりとさせていただいて、もっと県民からも、ただ競技をする方々のみじゃなくて、応援したい、参加したいなと思えるような大会に、今からやっぱりPRしていくべきじゃないかなと考えております。ちょうど今、「スポーツ都市戦略」という本を借りまして、早稲田大学の原田宗彦先生の本を読んでいるんですけど、この中には実は、阿南市の「野球のまち阿南」の記事も載っています。こういう原田先生とかの本を読みますと、やっぱり交流人口の中でも、キーワードがあります。県南は、特に自然に恵まれている。ですから、自然の中で、「健康」と「スポーツ」を繋げるような、何か持続可能なスポーツを、このワールドマスターズゲームズに向けてやっていく。なおかつワールドマスターズゲームズが終わったあとも、「健康」というキーワードでスポーツが持続できるような。それは、I委員やプロサーファーの方がおられますので、その辺を少し考えていく方向性が、僕は必要んじゃないかと考えております。

それともう一つ、宿泊需要、先ほどの民泊推進を言っておりました。こればかりは、私の地元新野町で、シームレス民泊を今頑張っておりますので、ぜひとも、引き続き規制緩和の観点と、スムーズに事務手続が済むように、県のバックアップ等をよろしくお願いいたします。

(B委員)

地域医療を守る会のBです。よろしくお願いいたします。

医療に関して2、3と、道路に関しまして1点、よろしくお願いいたします。

海部病院が新しく高台に開院してから、5ヶ月目に入ろうとしております。ハード面は、本当に県の御尽力で、海部住民、那賀住民も安心・安全になりましたけれども、やはりハードだけが大切じゃなくて、中身が必要なんです。医師不足も解消されておられません。県の寄付講座で、医師も確保されております。やはり、金の切れ目が縁の切れ目となりますので、どうぞ、寄付講座もこれからずっと未来永劫続けていただければと思います。

それと、その病院の横に、牟岐バイパスが通ると思うんですけど、それによりまして、下に住んでおる住民が遠回りして、一時避難場所に行くのが少し遅れると。バイパスが通る際には、必ず下の官舎の近くの住民も医師もおりますので、直結して上に上がれる避難路も考えていただければと思っております。

それと、海部病院が高台ですので、薬局がございません。下まで行くんですけど、もしも海部病院の敷地内に、薬局が持ってこれるとなれば、南海トラフが起きても、たくさんの住民を助けることもできますし、それを利用する住民も助かるのでなかるうかなというお声を聞いております。

それと、やはり海部病院の跡地の件が、今牟岐町の住民の間でも、大きな波紋を呼んでおりますし、行政も頑張っておるんですけど、何分、あれはまだ県の建物ですよ。県の跡地を、「もう知りません、牟岐町頑張らなさい」と言うんでは、牟岐町は貧乏です。なかなか行政も頑張っておるんですけど、そんなにお金がないんです。この間も説明会があったんですけど、5億円設備にかかると。私、考えたんですけど、県が、今も建物におりますね。2階から4階までは、すべて設備投資を県にさせていただいて、サテライトオフィスとか、企業とか、お遍路さんの簡易民宿とか。1階は、住民が頑張りますので、交流の場、今流行の認知症のカフェとか、500円玉コインカフェとか。そういうのは住民もできるんですけど、何分設備にお金がかかるんです。だから、今県が設備をきちんとして、上は県が管理して、1階は町の方に使ってくださいねという。ちょっと甘いですか。そういうふうな考え方も、県として、今黒字ですので、できるんじゃないかなと思うんですけど。その辺もよろしくお願いします。

それと、海部道路に関しまして、評価の中にも書いてありました。「A」と付いておるんですけど、何にも、住民には進捗状態がわからないのに、なぜに「A」だろうかと。海野副知事は、それに関しては大分おわかりになっておるんでしたら、また教えていただければ、住民も、それに対応して頑張れるかなと思っておりますので、そのあたりよろしく願いいたします。

(C委員)

Cです。よろしく申し上げます。

今日は初めてですので、勉強させていただくつもりで参ったわけなんですけど、あまり人前で話をするのが得意ではないので、御了承ください。

今日来るにあたり、先に配っていただいた南部圏域振興計画、資料4を読ませていただいた中で、54ページの中に、「青（みず）と緑（もり）が彩る自然環境・生態系の保全」という項目がございます。私は水産業の立場から、最近社会的に言われていることを、皆さんに御紹介させていただくという形で、意見を述べさせていただきたいと思っております。この中で、「きれいな水環境の実現に向け」、合併浄化槽への転換を促進しているということで、これは一般的に言いますと、とても有り難く、いい話だと思います。しかし、最近は「きれいな水環境の実現」と言うよりも「豊かな水環境の実現」という、言葉の違いだけのようにも思いますが、「きれい」ではなくて「豊かな」水の環境実現への動きが進んでいるというのが最近の状況でございます。あまりにきれいな水に人間がしてしまったことで、返って生態系が崩れてしまって、海に栄養分がなくなって、それで海藻類が育たなくなった、

海に栄養がなくなってきたと言われていています。水産業界においては、地球温暖化によって、水温の上昇や海に栄養がなくなってしまうことで、海苔やワカメの養殖業で色落ち問題が深刻化していたりします。魚も、漁獲高の減少など進んでおります。地域の実情に応じた各種污水处理施設の整備を促進するというございですが、汚水・排水の規制緩和を行って、豊かな海にしていくような動きの中で、県南において浄化槽の整備を進める際には、本当にそれが生態系を守ることなのか、自然環境をよりよいものをしていくことなのかを再度御検討していただきながら、バランスのいい推進をしていただきたいと思います。

(D委員)

よろしくお願いたします。いろいろ出させていただいているんですけど、今回は、人にいかに徳島県に来ていただくかということのみに着目して、いろいろお話をさせていただきます。それが移住であろうと、観光であろうと、いかに来ていただくかということを考えたんですけども、少し研究でいろいろわかったことも含めてお話しさせていただきます。

まず1点目、移住にフォーカスして、いろいろ調べたんですけど、今まで高齢者とか40代くらいの人に来てくださいねというお話をするのが一般的だったんですけど、いろいろお話を聞いてみると、どうも若い人の移住の志が高いということがわかってまいりました。大学を卒業してすぐに田舎に行こうという方も、結構都会にはおられるというお話を伺いました。そう考えると、今までの移住の考え方プラスアルファで、いかに若い人を呼び寄せるかということを実際に考えた方がいいのかなと。その時に思ったのは、簡単なんですけども、大学の就職支援室に行って、ポスターを貼らせてくださいと1枚貼るだけでいいんですね。ポスターって、多分いろいろ作られてると思うんですけど、東京に行った帰りにいろんな私立大学の就職支援室はかなり今もありますので、そこに貼っていただいて、若い人にできるだけこちらの方に目を向けていただけるというような施策も、ぜひ実施をお願いしたいなと思っております。プラスアルファなんですけど、それに加えて考えられるのが農業とか林業の後継者の問題かなと思っております。それは、いかにマッチングさせるかということも含めて若い人にこちらに移住していただくか。そのあたりを考えると、農業の勉強を何年かしていただいてとか、そういうことも含めて、ある程度支援をしながら、若い人を呼び込むというのが、やっぱり大事かなと思っておりますので、その辺もいろいろ考えていただくと有り難いと思います。

あと、観光の部分でいきますと、やはり東京オリンピックまで、インバウンド、いわゆる外国人の方がたくさん入ってくるということは間違いありませんけども、外国人の方の移動方向というのは、大体日本を横に移動します。よく言われるゴールデンルートというものなんですけど、東京から入るか、大阪から入るか、福岡から入るかは別なんですけど、基本的に横に動くんですよ。あと動かないのはどこかという、縦に動かないんですね、実は。と考えると、徳島県というのは、横に動く三好の方は強いんですよ。徳島市から三好の方は断然強いんですけど、南の方に来ない。そこから上の中国の山陰にも行かないんです。この辺を、できれば山陰の地方の方と手を取り合って、縦に動かす何か仕組みづくりをお願いできれば有り難いかなと思ってます。そうすると、外国人の方は楽しいと思えば、縦でも横でも移動するんですけど、今の状況は、横の方が移動しやすいんです。なので、不便でも縦の方が面白いと思う仕組みづくりをお願いできればと思います。

それと最後に、皆さんも御存じかもしれないですけど、ANAのホームページに「釣り倶楽部」というのが載っております。そこに1つのポイントとして、徳島県南の釣り場というのがあるんです。東京に行って、いろんな人と話をすると、私はそこに行きたいという方がかなりおられます。そういうふうに、企業とタイアップするのもいいですし、阿南は野球のまちでいろいろ頑張られている

んですけど、何か1つの趣味に特化して、そういう人たちを呼ぶという取組もぜひお願いできればと思います。それが何がいいかはわからないんですけど、そこに県の力だけではなく、できるだけそういうところに着目している企業さんを引っ張り込んで、いろいろしていただけると有り難いかなと思いますので、御検討のほど、よろしく願いいたします。

(E 委員)

Eでございます。私は今回2回目ということで、前回は所用で欠席させていただいておまして、まだ2回目の出席でございます。一応私は、阿南商工会議所の一会員として出席させていただいておりますので、地元の中小企業の経営者の方からの県へのお願いということで発表させていただけたらと思います。

国、県、あとはいろんなコンサルタントさんとか、徳島県内で言いましたら、徳島経済研究所、それから県の商工会議所連合会、商工会連合会、いろんな所から、各企業さんの方に、今現在の中小企業が直面する課題ということで、いろんな御質問等をいただいたりするんですけど、数年前でしたら、やはり施設の老朽化とか、工場だと製造ラインが古くなったから、県の方からの融資等で新しくラインを変えたいとか、そういった問題があったんですけども、今は、製造業、サービス業、外食、運搬、横並びで今一番問題になっておりますのが、従業員の確保、人材の確保です。それで、まず1点、県へのお願いなんですけど、中小企業ですので、やはり大卒というのはなかなか難しくなっております。専門学校か高校ということになってくるんですけど、やはり徳島県内は大半が公立高校でございますので、高校の新卒に関してお願いということで。釈迦に説法になろうかと思っておりますけれども、新卒の方が欲しいなと思いましたら、その前の年ですね、平成30年3月卒業生が欲しいなという場合には、平成29年6月1日以降に、ハローワークの方に求人票を提出することになります。つまり大学とは全く異なっておりまして、高校ですので、ハローワークの判をいただかないと、各高校の方から新卒者の方は紹介していただけないような形になっております。6月中にハローワークで点検していただいて、7月1日以降に、私ども事業者の方に求人票が入ってくるようになります。それで、少しでも早くということで、7月1日、2日あたりに各企業さんがいただきました求人票をコピーして各高校の進路指導担当、就職担当の先生の方にお送りさせていただいて、ぴったり今日なんですけども、9月5日が推薦開始となっております。私どもの会社も県南の高校、数校の進路・就職担当の先生方に直接お越しいただいて、この子を推薦させていただきますので、また入所試験をよろしく願いますということで、今日から変えるような形になっておりまして、9月16日以降に選考開始となっております。結局高卒の方を採用する場合には、決まったルールどおり進まない、採用できないような形になっておりまして、やはり県南にある事業者と言いましたら、どうしても徳島市内の大規模高校と言いますか、就職希望の生徒さんが多い高校の方には、なかなか目を向けていただくのが厳しゅうございますので、手前どもほとんどが小松島以南の高校を対象にしております。それで、できればということなんですけど、阿南市、那賀町、美波町、牟岐町、海陽町ひっくるめて、中小企業に県の方でアンケートを取っていただいて、7月中くらいにどこか1箇所、県南の事業所と県南の就職希望の高校生を対象にした合同の企業セミナー、各事業者のブースを、製造業に就職したい、物販の方に就職したい、サービス業に就職したい、そういう希望を持たれた方が、1日のうちで数社回れるような、そういったマッチングと言いましょか、企業の説明会。もちろん各々の企業でも高校にお声をかけて企業説明会等もいたしております。手前どもも今年も8月に2回ほど開催させていただいたんですけど、それを県の方でお声かけをいただいて、県南にある中小企業の合同企業説明会を開催していただけたらというのが1点です。

あとそれと、同じく人材確保の方になってくるんですけど、阿南商工会議所でも今年から、県南の高校生を中心にインターンシップを積極的に受け入れております。今年初めてなんですけど、6月21日に県南の高校、小松島高校、小松島西高校以南、小松島西高校と海部高校は先生の都合でちょっとお越しいただけなかったんですけど、あとは阿南高専をひっくるめて全部の就職・進路担当の先生方に来ていただいて、インターンシップ等の説明会をさせていただきました。できましたら、そのあたりも県の方でお骨折りをいただきまして、高校の1、2年生の方対象のインターンシップの積極的な参加を、各高校の方をお願いしていただいたらというのがもう1点でございます。

ですから、企業説明会は高校3年生、たちまち就職が目の前に迫っている方。1、2年生を対象にインターンシップの方を県にお願いできれば幸いかと考えております。

あとそれと、阿南市だけの話になります。今日は市長さんもお見えですが、今、商工会議所等が中心になりまして、中小企業振興条例を阿南市の秋の議会に提出させていただいております。順調にいきましたら、議会で可決をいただいて制定される見通しでございます。今、徳島県内は中小企業振興条例は、徳島県、徳島市、鳴門市、小松島市、これで阿南市ができます。4市が振興条例を持つわけなんですけども、振興条例ができなくても、やはり絵に描いた餅では仕方ないと思いますので、県の方が一生懸命、各市町村の振興条例を持っているところにもお声かけいただいて、それが有効活用できているかどうかという、そのあたり審査といいますか、いろんなそのあたりもアドバイスをいただければ幸いかと思います。

(F委員)

海陽町地域おこし協力隊のFと申します。本日は、貴重な会に参加させていただきありがとうございます。大変萎縮というか、緊張しているんですけども、2点ほど提案させていただきたいことがございます。

まず1点目なんですけども、私が地域おこし協力隊として活動する中で、移住希望者の方にもお会いすることがあるんですけど、そういう方たちが、一番不安に感じていることは、海陽町とか県南とかに移住して、安定した仕事があるのかということところが、やっぱり不安なところで、特に家族を持たれている世代の方は、そこが一番重要なポイントになってくるんじゃないかなと思っております。海陽町にいる若い人たちでも、海陽町に仕事がないから外に出て行くという人もいらっしゃるんですけども、海陽町に仕事がないわけではないと私は思っていて、農業、漁業、特に1次産業は、安定はしてないんですけど、人材が欲しいというところが結構ありまして、時期にもよるので、繁忙期と閑散期がありますので、この時期だけは人手が欲しいとかいうことが結構あります。それで、そこを繋げていって、1年中安定した就業ができるように、人材派遣制度のようなものを作って、いろんな仕事を繋げていって、通年安定した職業に就けるっていうシステムがあれば、もう少し移住希望者が海陽町とか、県南に来てくれるような流れができるのではないかなと思っております。

あと1点なんですけど、漁業の魚価を上げていくために、6次化というものを進めていると思うんですけど、美波町にできた6次化センターに行かせてもらったことがあるんですけど、そこでは、最新の機械とか、レトルトができる機械とか、干物が作れる機械とかがいっぱいあって、すごい魅力的だなと思ったんですけど、そこで作ったものは販売はできないということをお伺いしていて、そこが販売もできて、料金を払って、漁師さんが魚を持ってきて、その魚を販売できるような形で、漁師さんにまた卸すっていう形のOEMの仕組みができれば、もう少し漁師さんたちも、自分では6次化できないけど、そこに持って行って、自分たちで魚の価値を高めていく活動をしようという気持ちが生まれるのではないかなと思っています。なので、OEMができるように検討していただけたら幸いです。

(G委員)

美波町のGです。

移住の広報についてのお願いと、空き家の問題について2点お話させていただきます。

今、7月から1月が移住の激戦期に入ります。繁忙期と、2つあるでしょ、農業で。あれみたいなもので、7月から1月までがものすごい戦いの季節です。何と東京でイベントが、各県1、700行われているんですよ。各県ですよ、フェアじゃなくて。その中で、徳島県が行きましたら、どんなかわいそうなことが起こっているかと言うと、それはそれは悲惨なんですよ。人が集まってないです。それくらい結局、魅力的じゃないとか有名じゃないとかいうことが、知らしめられてないということがよくありまして。それで、県南の連携、前から一生懸命お願いしていたのが、少しずつ効果が現れてきてるんですけども、私もじっと考えたんですけどもね、本当にあの1、700やってる中に、羽田空港のあの電車の中にずら一と、お金のある県は「やっています」というのが並んでるんですけど、徳島県はあそこまですることないなって思ってるんです。ほんとに。お金ぶち込んでやるのは。ここで、一体何がやれるかと言ったら、Uターンの人のための広報を、県内向けにもっとやったらどうでしょうかというのが私のお願いなんです。県内に向けての広報って、すごいやりやすいと思うんですよ、徳島新聞とか。移住の人に対して「やっています」「やっています」と、毎日毎日の紙面に出てるんですけども、那賀町の「もんでこい」みたいな感じでやられたら。おとといも大阪行ってたんですけど、このごろフェアに行っても、徳島出身と言う人が座るんですね、前に。その人たちには、ぜひ帰ってきてほしいんです。若い人もそうです。Dさんがおっしゃったように、県外の人を呼ぶにも。県外の方は、この間CCRCの事業で、移住者に防災意識の調査したんですけど、まるで方言がわかってないということがはっきりしました。全然理解できてないんですよ、びっくりしました。大阪・神戸の方でもわかってないんですよ。聞き取れてない、町名がわからない、言ってることがわからないということが起こってきています。

それと、美波町にもいらっしゃったんですけど、今度和食の店ができるんですけども、その奥さんが徳島の吉野川市の方なんです。みんな田舎ですから、「どっから来たんえ」とか聞くんですけど、「吉野川市って言われん。鴨島って言え」と言ってるんです。「鴨島出身なんです」と言ったら、まあ町の人の反応がころっと変わるんですよ。あれ面白いですね。どこ出身かがわかるんですね。「鴨島。県内の人え」と言って、受け入れる側も全然違ってきますので。何で県内広報してくれと言うのかは、こうなんです。お父さん、お母さんが見てると思うんです。さっきDさんがおっしゃったように、学生、若い人たち、大学。お父さん、お母さんが「そうか、県内に帰すという手もあるんやな」って。意外と子どもさんって、帰りたいと思ってるのに、親が言ってくれないというのもあるんですね。だから、親御さんが「帰ってらっしゃい」とか。それから県外に出られて、お年を召した方が帰ってくるとかという手もCCRCで使えるんじゃないかなと思うので、県内広報をうんと。「『帰ってきましょう、徳島に』と声掛けてください」という感じでやっていただけたら、お金もそんなにかからないし、効果も出るのと違うかなとは思ってるので、取り組んでいただきたいと思います。

それから空き家の問題ですけど、空き家のことを年がら年中やってるんですけど、この間も、町長と空き家の協議会をやったら、やっぱり出てくるのが、さっきCさんもおっしゃったように、水のことでもあるんですけど、最終は浄化槽にかかっているんですよ。水洗トイレにかかってくるんですね。下水工事は間に合わないと思っています。徳島中張り巡らすのは。いかに浄化槽で、空き家に水洗トイレを付けるかどうかです。他がぼろでも水洗トイレが付いていると、結構移住者の方って食い付いてくれるんですよ。まず、本当に最初に聞かれるのが、聞かれるのじゃなくて、そんなの水洗トイレ以

外の空き家は、移住者の方に向けて出せないんですよね。空き家を改修する時に、ものすごいお金がかかるのが、浄化槽なんです。この間も、さっき言った和食の店をやるんですけど、浄化槽にいくらかかったと思いますか。もう泣きそうでしたよ、お金出していただくのに。300万ですよ。40人槽。下水が来てたら、何十万なんですよ。そういったことにも、起業にもひっかかってくるんですね。起業するにも浄化槽問題が起こってくるので、ぜひぜひ、もうちょっと。普及効果というより、金出す効果の方が大事だと思っておりますので、御検討いただけたらと思います。お願いします。

(H委員)

美波町のHです。

私は、提案でないかもわからんけど、今まで自分たちがやってきたことと、今からやろうとしていることを発表したいと思います。

私たち自主防災会は、2013年ごろから、阿南市福井町の小野地区と海山連携を始めました。これは、小野が「クリーン作戦」の時、美波町からお手伝いに行く、そして、美波町でやる「避難まつり」には、小野の人に来ていただく。そういう連携から始まりまして、美波町のワカメ、それに福井町のタケノコの炊き出し訓練もやっています。ドローンによって、SOS発信の写真を撮ったり、そんなことをしています。このように、行政の枠を越えた地域と地域の連携、これは私たちの力だけでなしに、やっぱり多くの人によって始まりまして。マスコミ関係の人とか、南部県民局の人とか、そういう人の力もいただきまして、このような連携を美波町、阿南市の首長さんに認めていただき、今年6月29日に、福井南小学校で、大規模災害時には相互に助け合うという協定書に調印させていただきました。本当に有り難く思っております。

これからも、世の中は何が起こるかわからない。海じゃなしに山からも川からもこういう災害が起こる。そのためには、やっぱり地域と地域で助け合っていくのが大事なことだと思っております。海山連携、相互協力によって、強い絆が必要ではないでしょうかね。私らは、こういう地域の仲間たちを集めて、これからも海山連携を進めていきたいと思っております。

(I委員)

Iと申します。よろしく申し上げます。

私は現在、海陽町で、総合型地域スポーツクラブ、海陽愛あいクラブという施設でクラブマネージャーをさせていただいております。総合型地域スポーツクラブというのは、実は全国で3,000店舗ほどあるんですけども、まだまだ知られていないというのが現状で、何十年も前に国が、いつでも誰でもどこでもスポーツができる環境をとということで、作られた施設なんです。徳島県内にも、今34施設。まだ若干ない地域もありますが、ほとんどの町にありまして、特に人口の少ない過疎地域ですとか、民間のスポーツクラブが入ってこれないところは、こういった総合型地域スポーツクラブの施設によって、町民の皆さんの運動、健康増進施設として、大変皆さんが使われているんですけど、日々そういった施設で働いていまして、ちょっと気になることがありましたので、お話しさせていただきたいんですが、プラン4の「健やかに暮らせる保健・福祉・医療等の連携体制の充実・強化」というところで、ちょっと総合型も加われたらなということで、ご意見させていただきたいと思いません。

血管疾患による脳卒中など重度のリハビリの病院での期限というのが、6ヶ月になっておりまして、一般的には6ヶ月以内のリハビリはとても重要と言われております。実は、その後、退院後の回復期以降の過ごし方もとても重要なんですね。通常退院後というのは、医療保険か介護保険によって、介護

を続けることができるんですけども、医療保険では、週1回ほどの通院、そして介護保険の場合は、後遺症が残った人の場合は、継続的に無期限で続けられて、訪問リハビリか通所リハビリかを行えるということがあるんですけど、度合いによって、自己負担額が変わるんですね。そういったお金の問題というのがあるんですけど、それだけではなくて、実は、半年経って自宅に帰ってから、病院のようなりハビリが続けられなくて、退院時が一番体調が良くて、それを期にどんどん悪くしてるというのが、今の現状なんです。そういった事例をよく聞くんですが、なぜ聞くかと言うと、今、私が勤務している総合型地域スポーツクラブにも、そういったリハビリを目的に来られてる方が数名いらっしゃるんです。10年前に脳卒中をして、介護保険も使わずに自分で体を動かす、このままだと動かせなくなるので、頑張って毎日通われているという方や、1ヶ月前に退院してきたばかりで、ちょっと家でゆっくりしていたら、本当に体が硬くなって動かなくなったので、慌てて、通院しながら来られてるという方がいらっしゃるんですね。私も長いことこういうスポーツクラブで働いてるんですが、最近こういう方が多くなってきたことに、実際驚いているんです。

ますます今後は、高齢化が進んでいきますので、医療機関だけで対応しきれなくて、介護施設だけでも対応しきれずに、こういった運動施設に皆さんが運動しに、リハビリに来られるというのが、ますますニーズが高まっていくんじゃないかなというのが、ひしひし思われるんですが、そこで大事なのが、地域の包括ケアの方とか、地域のリハビリセンターの方と連携を取るのだと思うんです。プラン4の「地域包括ケアシステムの構築」ということで、その中にですね、県下のほとんどにある総合型クラブを。単に健康な人たちがスポーツを楽しむだけじゃなくて、これからは、リハビリ施設や機能回復の施設として、そのシステムの中に、総合型クラブを盛り込んで、もっと活用していただければと、今後は考えていますので、ぜひその辺も検討していただければと思います。

(J委員)

はじめまして。Jと申します。株式会社きとうむらの方から、今回参加させていただきます。また、木頭地域の木頭ゆずクラスターの方のメンバーでもありますので、そういった点から参加してはどうかというお声掛けもありまして、参加させていただくことになりました。また、神奈川県からの移住ということで、夫の方は木頭出身なんですけど、そういう観点からもご意見させていただければと思ひまして、今回2点用意しました。

1点目はゆずに関する事で、私の今の職場であるきとうむらの方でも、木頭ゆずをテーマに、いろいろな方がいらっしゃいます。学生さんであったり、国内の高知大学、四国大学、徳島大学、それから立教大学、東京の方からも来られることもあります。また、海外からは、前の職場がJICAだったこともありまして、開発途上国のエチオピアとかスーダン、セルビアとか、そういった所から、6次産業を学ぶとか、地域の暮らし方とか、開発に関してとか、そんなのを組み合わせて来られることもあるんですけど、そういう方たちには、いつもゆずを取ったり、ゆず絞り体験をしていただいたり、それから地域通貨の「ゆーず」というのも、紙切れなんですけど、あるので、それで地元で買い物してもらったり、そういう経験もしてもらっています。

また、オーストラリアの方から、栗農家が、栗と一緒にゆずも育てるとというのがオーストラリアの方では、最近される方も多いうので、世界的にゆずが流行ってきているというのもありまして、それで、ゆずの先進地域である、木頭だけではなくて、馬路の方にも行かれたみたいですけども、そういった馬路の方と木頭と、自費でオーストラリアからわざわざ来られる農家の方もいて、栗の方は今東京の方で卸して、順調にされているようなんですけれども、そういう方たちも来られて、そこでふと思ったのは、海外に輸出しているゆず、このゆずは、国内県内の観光にも使えるんじゃないかと思

いまして、交流の資源としても、これから有効活用すべきじゃないかなと思いました。輸出が伸びると、海外の注目も浴びますので、それをテーマに、実際に現場がどうなっているか見に来たくなる人も多くいると思うんですけども、それでちょっと思ったのは、木頭はお遍路さんの道からはアウェーですので、そういう意味で、他の遍路道みたいな、ゆずの遍路道みたいな、「ユズトレイル」、道という意味で、「YUZU TRAIL」。「ゆずが採れる」という意味も兼ねて、スタンプとかで巡ってもらってもいいかなと思いました。「YUZU TRAIL」は、元々の発想は、前にスリランカの方に JICA の仕事で居た時に、セイロンティーで有名ですので、そのセイロンのお茶畑を巡って、お茶園で買い物をして、お茶のテイスティングをして、そこで泊まって、製造工程も見てという「ティートレイル」というのがありまして、それが大きな観光資源にもなっているので、そういうものも兼ねて、木頭ゆずやゆこうやすだちも合わせてもいいと思うんですけど、さらに高知県まで行って、北川村とか馬路村とか、愛媛県のオレンジとかみかんとか、そういうのも合わせて全部で「四国のシトラストレイル」でも面白いかなと思うんですけど。そういうのができて、それから広がるのかなと思いました。

それともう1つは、スポーツと健康というキーワードが今出ていきていると思うんですけども、2020年のオリンピックに向けて、いろいろ県民も健康でいられるように、健やかにということで、神奈川県から移って、ちょっと1つだけ思うことがありまして。今は生涯学習で、ヨガクラスに通ったり、バドミントンとか卓球とか、体育館も充実していますので、スポーツはしてるんですけども、あったらいいのになと唯一思うのが、筋肉トレーニングのジムでして、ちょうどIさんの一声というような形で、そういったお話もあつたんですけども、市内の方でしたら、まだ民間とかの筋肉トレーニングの場所もあるんですけども、那賀町には、おそらく私の知ってる限りでは、上那賀病院の入り口にちょっと機材があるだけで、ちょっと木頭から行くにも遠い感じで、ウォーキングしている方もいっぱいいらっしゃるんですが、やっぱり背筋を鍛えたり腹筋を鍛えたり、腕の筋肉を鍛えたりとか、ロコモーションと言うんですかね、そういったのは、みんなで何か一生懸命筋肉トレーニングの方がいいかなと思まして、そういう中古の機材でもいいんですけど、簡単に気軽に使える場所が、図書館の上でもどこでもいいんですけど、あったらいいなとちょっと思まして、スポーツ施設って、県では少ない方なのかなと思ましたら、文科省の都道府県別のスポーツ施設数を確認したところ、やっぱり47都道府県の中でかなり最下位の方みたいでして、その中でトップレベルのものもあるんですけど、例えばゲートボール場とかは多かったんで、作ろうと思えば結構勢いで作れると思いますので、県民のQOLを向上するためにも、ぜひどうかなと思います。

(K委員)

初めまして。海陽町から参りましたKと申します。

海陽町最南端、旧宍喰町の海岸の前で、iBB (in Between Blues) という藍染めとサーフィンとお遍路をテーマにしたお店を経営しております。その店の内容が、自分自身の活動のテーマそのものなんですけども、サーフィンと藍染めとお遍路、それぞれ徳島県だったり海陽町だったり四国が有する3つのキーワードをテーマに、ものづくりとか情報発信を個人的にはやってるんですけども、これは個人的な活動ではありつつも、地域の財産だと思っています。ゆくゆくは個人とか会社ではなくて、地域全体で取り組んで、そのテーマを軸に、大きな取組ができるまでに持っていけたらいいなと思っています。独立してまだ半年なので、まだまだこれからなんですけども。

自身が藍染めに関わり出したのは、県南の株式会社トータスという藍染めの無農薬栽培から染色プロダクトまで手がける会社で、6年間務めてたというのがまず大きくて、それがきっかけで藍とい

う徳島の伝統産業に携わることができているんですけども、その藍、そして20年前、今34歳なんですけど、地元宍喰に、両親がプロサーファーでこっちに大阪から移住してきて、僕は宍喰で生まれ育ったんですけど、そんな縁で14歳からサーフィンを宍喰の地元の海で覚えて、かれこれ20年サーフィンを続けています。18歳から27歳まで海外、全国いろいろ回ってきました。そのサーフィンと藍と、あとはお遍路、お遍路はちょっと後に回すとしても、そのサーフィンと藍というキーワードを中心に今動いているんですけど、たまたま今回、オリンピック2020が東京に決まって、世界で初めて正式種目にサーフィンが取り入れられたことと、エンブレムのデザイナー野老朝雄さんが、あのエンブレムのコンセプトカラーを藍と発表したことを受けて、今世の中が藍とかサーフィンとかに注目するいい機会が、機運が、自分がやってきたこととシンクロし始めている現状があったりもして、そのテーマが今、これからオリンピックに向けて3年間ますます気合いを入れてやっていきたいなと思って、いろんな県の方であったりだとか、メディアの方にもいろいろ協力していただきながら、自分の情報を提供しながら、今進めています。

その藍とサーフィン、もちろん土と水がないと。藍染めというのは農業から始まる染色文化で、昔ながらのやり方でやると、土も水も汚さずに還っていく、自然由来の、人や自然に優しい染色文化で、石油製品、インディゴピュアーという石炭から取れる化学染料というんですかね、それがドイツで開発されて日本に入ってきて、もう完全に衰退の一途をたどってるんです。僕はそんな藍のことを知らなかったんですけど、まずサーフィンを通じて世界中の日本中の海を回ってきて、いろんな自然、海、そこで暮らす人たちと触れる機会があって、やっぱり自然がすごく一番大事やなど、個人的な価値観なんですけど、お金も物もちろん資本主義社会においてすごい大事なんですけど、サーフィンを通じていろんな人といろんな土地を巡る上で、僕はやっぱりその自然、水、土というのが、一番にくる世の中になってほしいなと。それに付随してお金も物もちゃんと付いてくる世の中であるべきなんですけど、そういう価値観を持って帰ってきて出会ったのが藍染め文化だったんです。帰ってきたのが海陽町で、徳島県は鳴門から室戸まで、徳島県でいうと宍喰まで、全海岸線全域にサーフスポットがあって、特に阿南から南に関しては、世界的にも有名なスポットがいくつかあります。特に僕は海陽町、地元の海部川河口というところの波にすごく魅せられて、昔からずっともう10代から、自分の地元には何もないとか、自分の地元が嫌だとかは思ったことないですね。海部の波は世界一だと思って育ったし、出て行っても、いつも地元の自慢をしていました。それでいろいろ回ったけど、どこかに根を張って生きていこうと思ってた時に、26、7歳かな、ふらふらやってるのも根無し草でやるのも限界を感じて、どこか一所を定めないとと思った時に、迷い無く海部川河口の波の近くに住もうと思いました。それで帰ってきて出会ったのが藍染めの文化で、それが自然由来で、僕が大事にしたい海とか水、川、山に負担無く、人が人として生きていくためのサポートをしてくれる文化という、1つは藍染めということで、藍の色もちろん好きだったんですけど、自然に優しい、自分の地元の大好きな自然に沿った生き方、文化というのにすごく共感して、サーフィンと藍というのをテーマに、この8年仕事を、肩書きも何もないけど、それがすごいと思ったので、それを仕事にしようと思ってやってきました。

独立して、その延長上で四国に8年前帰ってきたら、お遍路さんに、自分の家の前が遍路道なので毎日のように会いますし。たまたまこの藍の色っていうのが、僕の好きな海と空の色が植物から出せる文化で、お遍路文化を創った空海さんも、空と海から名前をもらっていて、何か「青」で自分のふるさとの魅力というのが全部が合致したというか、藍染めとサーフィンとお遍路が僕のふるさとのすごい誇りだなと。5年前くらいから思いだして、こういう商品開発に取り組んできたんですけど、自身の活動が、今回のオリンピックであったりとか、周りちょっと波長が合ってきた感じがあって。

今までは、もしかしたら自分の自己満足だったかもしれないんですけど、結局、僕とかトータスとかがいくら頑張っても、何ぼいいと思っても広がらないジレンマというのがずっとあって、トータスは今もお世話になっているけど、農業ってやっぱり続けていくのは難しいし、今の世の中において、圧倒的マイノリティの藍染めというのを商売にするというのはすごく大変で、何かすごくいろいろ壁にぶち当たりながら、それでも続けてきたら、今オリンピックの追い風が吹いてて、このチャンスに、できるだけその価値を、いろんな人とか行政とかと共有していきたいと、すごく願っています。

野老朝雄さんというエンブレムのデザイナーさんも、毎月徳島に来てくださっていますし、オリンピックで今、世界で最も注目されるアーティストと言っても過言ではないような方が、藍とかサーフィンとかを通じて、今徳島県であったり海陽町であったりに来てくださっているというチャンスも実際にありますし、これを自分一人の繋がりじゃなくて、地域とか行政とこの人の繋がりも一緒に共有して、せっかく繋がったこの御縁を活かせるようにしたいなと思っています。

最終的に、僕が何が言いたいかといったら、サーフィンにもうちょっと、地域にメリットのある文化であることを、藍染めは十分信頼があると思うんですけど、ことサーフィンに関しては、やっぱり地域とか住民が、サーフィンというスポーツに対して、すごいステレオタイプ、固定概念がまだ強くはびこっていると思っています。それが、サーフィンという文化を活かしたまちづくりとかに活かせてない、一番の大きな要因だと思います。僕はそれを取っ払いたくて、なぜなら、たかだか一人で少ないかもしれませんが、サーフィンを通じて地元がやっぱり一番いいと思う価値観を実際に持っている僕みたいな人間もいますし、実際、芸能界であったり、大きな会社の経営されている方とか、選べばサーファーの中にもすごくいい人がいっぱいいます。地域にとって、すごい恩恵をもたらしてくれる人材というのが、常にその波を求めて県外とか世界中から、わざわざ自腹で海陽町、県南に来られています。一括りに「サーファーは」と言って全部シャットアウトしてしまってきた今までのこの関係性を打破しないと、これから3年後のオリンピックに向けて、藍とかサーフィンとかで、この地域の魅力に世界とか全国、ひいては町を出て行った若い人とか、住んでる方に地域の魅力を再発見する一つのきっかけとして、サーフィンだったりを活かしていくためには、この現状じゃダメで、それをどうにか拭いきって、もっとサーフィンのいいところ、サーファーももっと波だけじゃなくて、僕はそのためにサーファーにも、徳島は波だけじゃないよと知ってほしくて、藍染めであったりお遍路であったりすばらしい文化があって、おいしいものがあって、木頭のゆずも神山のすだちも鳴門のワカメも、海陽町の伊勢エビとか、いろんないいもの、波だけじゃなくて土地とか人とか食、すべてにフォーカスして来てもらえるような仕組みを作っていけたらいいなと思っています。ゆくゆくはそれが移住に繋がって、例えば漁師さんとか農家さん、第1次産業の担い手とか耕作放棄地を活かせる人材の確保に、サーファーという人材を使えたりとか、神社仏閣のお祭りの後継者不足ですよ。海陽町で言うと轟きの滝という、それこそ水のルーツ、祀る水神様がいらっしゃいます。そこも神社はぼろぼろです。すごく残念です。僕がサーファーに呼びかけて、神輿の担ぎ手を、この8年ずっと通っているんですけど、そういう神輿、神社とかお祭りの存在に気づくとか、そこを大切に守っていく人を増やすこととか、あとは植樹も。海陽町って、宍喰の奥とか海部川の奥で植樹活動をずっと20年、30年やられている方がいます。海だけじゃなくて、山と海のつながり、水がその山と海を繋いでいるんですけど、そういう自然の営みを人の力でちゃんと、人と自然が寄り添っていけるような活動に、サーファーにももっと取り組んでいってほしいと思うし。そういう僕自身の発信というか、僕がいいなと思っているものに共感してもらって、そういう人が一人でも増えるようにしていきたいんですけど、やっぱり個人では限界があるので、ぜひいろいろ、1つの県南のキラコンテンツ、世界に通用するものとして、取り入れていただけたらと思います。

すみません、もう1個だけ。一昨日、たまたま徳島大学のG Iという、グリーンインフラに取り組まれている方が来られてたんですけど、要は防災と景観・観光、今まで県南域の土木工事に関しては、防災の方がメインで、観光業、特にサーフィンとか他所から来た時に、景色を価値として売るという感覚がなかったと思うんですね。ただ自分のお店は、海が目の前で、その景色に魅せられていろいろ来ます。サーフィンとか藍とかも抜きにして、海の景色、轟きの滝の景色が美しく、それを写真撮りにきたりという若い子が実際増えています。景色を活かした観光とかビジネスというのも、今まであんまり着手されてなかったコンテンツだと思います。僕の店の前で言うと、テトラポットがあったりとか、それは防災のために致し方ないことも事実なんですけど、もう少しそのあり方、京都でいうと鴨川の川沿いって、意外と石組み、ちゃんと石で組まれててコンクリートを使ってないとか、土木と街並みの景観のバランスが取れていて、すごくお手本になるなど、京都に行くたびに思うんですけど、そういった実際に機能的な部分と景観と、観光ツーリズムというのも、何かことを起こす時に、そういうアイデアとか情報を共有していけたら、よりバランスの取れたまちづくりとか、地域の景観が作っていけると思うし、それが人の流れにつながっていくと思うんで、その辺も踏まえた活動にしていけたらと思います。すみません、ちょっと長くなりましたけど。

(L委員)

那賀川こまちの会長をさせてもらっていますLと言います。

若い人たちの思いをたくさん伝えていただいて、私もちょっと、そのエネルギーをもらって意見を少し発表させていただきたいなと思います。

今年の6月くらいに、保津川下りをすることがございまして、楽しくそれは終わったんですけども、後で、その代表理事の豊田さんという方が記事を出されておりました、その中に、山と一緒にやなと思ったこともありますので、ちょっとその辺のことを発表させていただきます。450年くらい、この保津川というのは、先祖さんがずっと繋いでいってるわけですね。今年、亀岡の無形文化財の指定を受けたんですけども、その時に、ずっと受け継がれてきた技術体系、それ以上に、技術を支えた精神性の重要性を市に訴えたそうです。それで、無形文化財の指定を受けたんですけども、山も一緒だなと。これから皆伐がどんどん進んでいく中で、やはり即戦力ということ进行全面に出していくように思われるんですけど、技術だけでなく、これから日本の林業を背負って、立っていただく若い人たちに、やっぱり先輩たちのいろんな思いとか、今ちょっと起こっていることは、仕事を早くこなさないといけないのか、理由はちょっとわかりませんが、残存木に傷が付いて、次に売ろうとする時に、商品の価値がぐっと下がってしまうようなケースがございまして。やはり、元というのは、やっぱり元なので、そういうところに、いろんな気配りというか、そういう思い、先人たちの思いも引き継いで、森づくり、山づくりを、今ちょっと難しいかなと思うんですけど、していただきたいなと思っております。

それと、先ほどこの資料をいただく前に意見を出させていただいたので、その資料とちょっと重なる部分がありましてですね、なぜ災害が起こるんであろう。なぜ自然が壊れていくのかということの、一番根本の解決策を、ちょっとお聞かせいただきたいと。資料3の中で、自然から住民を守る、災害対策工事の推進ということもありますけれども、これは災害が起こった時に推進しなければならないんですけども、やはりそれを起こりづらくする山づくりというものではないかなと思っております。先ほど、CさんとかKさんも言われてたように、豊かな森、豊かな自然、やはりそれが川、海に思いをつないでいくので、そういうところもきめ細やかに指導する方もいるのではないだろうか。そこに、やはり人材育成ということが関わってくるようになるんじゃないかなと思います。

それと、いくつか質問がございますが、これはまた別にお伺いするというので、今後は皆伐が進むと思われますので、やはりその課題としての、人、担い手をどのように確保するのですかと。これは私も、人づくりはやっぱりお金と時間がかかりますと、私はこの会に参加させていただいて、思いは言わせていただいていると思うんですけれども、やはり、自然を観察するということが、災害にも強くなる山ではないかなと思いますので、今、人材育成がすごく困難な時になっておりますので、それをどのように確保するのか、ちょっとお伺いしたいと思います。

他の質問を言ったら、時間が足りなくなりますので、また別の時にお伺いしたいなと思います。

(M委員)

いつもお世話になっております。JAかいふのMでございます。本日は、よろしく願い申し上げます。私の方から、2点発言をさせていただきます。きゅうりタウン構想及び農産物の価格低迷についてでございます。

まず、きゅうりタウン構想でございます。このきゅうりタウン構想については、海部郡の特産である促成きゅうりを核とし、移住就農による担い手確保や産地拡大を目指し、県、海部郡3町、JAかいふが一体となって進めておる事業でございます。現在の取組状況といたしましては、新規きゅうり農家を育成する「海部きゅうり塾」では、第4期生の育成を進めております。8名全員が東京、大阪、愛知などからのIターン者で、中には、小学生以下の小さな子どもをお持ちの方が3組いらっしゃいます。全部で13名でございます。この8名については、きゅうり栽培の研修を熱心に勉強しつつ、休日には、サーフィンや釣り、地域のイベントなどを楽しんでおります。「半農半X」の生き方を実践しております。これらを見ていますと、県でも現在、熱心に取り組まれておりますが、「きゅうり版・働き方改革」の提案で、今後、移住就農希望者の募集をやってみようと考えています。先月27日には、東京有楽町の交通会館にて、県、海陽町、丸本さん、私が行って募集を行ってまいりました。反応は大変よかったです。

また、「次世代園芸ハウス」を今年海陽町、美波町で3棟の建設を進めており、今年秋には、「海部きゅうり塾」の2期生、3期生の4名が就農する予定となっております。この2期生、3期生の4名が一日も早く一人前の「きゅうり農家」となるべく、今後も栽培指導などを行うことを考えています。

さらに、今年11月14日、15日に、牟岐町において、県内はもとより、全国からきゅうりの養液栽培に取り組む生産者、技術者に加えて、大学、関連企業が一堂に集い、きゅうり養液栽培の技術確立に向けた取組を加速させるとともに、次世代の園芸産地の展開を目指すため、「全国きゅうり養液栽培サミット」の開催を予定しております。

これら「きゅうりタウン構想」の取組について、今後とも御指導、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

次に、2点目といたしまして、前回2月にこの会議でも発言させていただきました農産物の価格低迷についてです。県南の稲作については、ほぼ刈り取りも終わり、お米の出荷をしているところです。お米の価格については、3年前の最低水準から、近年、少し回復基調にはありますが、最も高い時に比べれば半分強となっておるところでございます。このお米を含む農産物の価格低迷が、農業者の所得低下を招き、農業離れや耕作放棄地の増加など悪循環を招いていると思われまます。このため、国・県におかれましては、飼料用米の制度の創設などにより農業者の所得増額の取組を行っていただいておりますが、根本的な対策とはなっていないと私自身は感じておるところでございます。

やはり、農業者の所得向上には、お米や野菜など農産物を消費者の方が、10円でも20円でも高

く買っていただくことが、最も良い方法とっております。消費者の方には、安い物でないと買えないという事情があるかもしれませんが、我々農業者の立場といたしましては、それぞれの思いを込め、生産しています。少しでも高く買っていただければ、助かります。農業者も増えていくと思います。このことについては、私自身の普段から感じていることでありますので、今後の施策の参考にしていただければと思っております。ちなみに、うちもお米を10キロ4,000円で販売しております。1升にいたしますと、606円くらいです。家内と私は2人暮らしでございます。1日に2合あったら、十分お米はあります。2号の価格は、120円くらいでございます。このペットボトルは、最低150円はします。このペットボトルよりも1日食べるお米が安いんです。こんな不合理なことはございません。本当に、農産物、漁業でも同じです、もう少し消費者はお金を出していただければと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

(N委員)

隣の阿南市文化会館を中心に活動しています、夢ホール市民協議会夢つくり阿南のNと申します。

今日は、3点準備してきたんですけど、まず1つ目は、全く素人の一市民の不安なことなんですけれども、核のごみなんですけれども、先日、適地が公表されてから、いくつもの県が受入れ拒否を表明して、徳島もいち早く表明して下さったんですけど、表明したとは言え、核のごみは増え続けると思うので、どういうふうを考えればいいのかということを考えたいのではないですけども、表明すべきではないかなと不安に思っている点が1つです。それは不安だけなんですけど、例えば、原子力発電所が、エネルギーだけの問題ではないという意見もよく聞きますので、また考えてみたいと思いました。

残りの2つは、文化に関係したことです。阿南市文化会館は、今年で18年目になりますし、私たちの活動も19年目になりますけれども、その活動の中で、会館で催し物が行われる際は、もちろん市や会館が主催することも多いのですけれども、市民団体が主催した活動というのがよくあります。会館の方たちは、防災訓練などもなさっているかと思うんですけど、市民を巻き込んでということがなかなか難しいと思いましたが、私たちが活動の中で不安に思ったこともありまして、今年の6月なんですけど、A委員さんにお越しいただいて、会館職員と催し物主催者のための防災講座というものを行いました。文化会館だけでなく、あちこちの会館にもお声掛けをして、他の会館職員の方にも来ていただきました。その中で学んだことというか、気がついたことで、来年4月に避難訓練コンサートを行うこととしました。コンサートを行って、お客様も来ていただいて、「さて」というような状況で避難訓練をしようと考えております。主催者だけでできることではなくて、会館の職員の方たちとどういふふうに連携を取ったり、協力し合ったり、力を合わせるなり、どこどこは職員が持つからねというような責任分担も考えつつ、防災訓練に向けて、本当に門外漢だったんですけども、考えていかなければならないなと思っております。コンサートに来ていただくのはもちろんどなたでも構わないんですけども、県内にいろいろ会館があると思いますので、いろんな会館に声を掛けて、一度経験して見ていただきたいなと思っております。この避難訓練コンサートは、全国あちこちで新聞にも出ていましたけども、行われていますので、先進地をこれから勉強させてもらったり、各方面の方たちに協力をいただいて、勉強させてもらいながら進めていこうと思っております。また、ハワイエでは、防災グッズの展示とかもしてみたいと思っております。もう一度日程を申しておきますけれども、来年の4月21日、これは土曜日で、午後2時からです。出演は、徳島県の警察音楽隊、入場は無料で、年齢制限もありません。入場整理券は配付させてもらおうかなと考えています。

3点目なんですけれども、観光について、いろいろお話が出ていたんですけども、例えば、社会

人のバンドとかオーケストラとかも合宿をするんです。大きな音が心置きなく出せる場所で合宿をします。例えば、スポーツのようにここでなくてはできないというわけではないので、こういう自然があるから、ぜひうちで音を出してくださいという声掛けはできないかもしれないですけども、自然が豊かにあって、音も気兼ねなく出せてという場所がありますよという声掛けはできるかなと思います。例えば、全国大会とかコンクールとかで、徳島で合宿ができますよというふうな広報などもできるのではなかなと思います。私たちは夢ホールで、18回目になるのかな、夏休みに「みんなでピアノ物語」というのを行っています。小学生1年生以上のどなたでもピアノを弾くことができる公募の演奏会なんですけれども、10年越しで東京から演奏に来られる方もいらっしゃいます。高知もいらっしゃるんですけれども、ピアノを弾くだけで来られてるんです。夏の旅行の楽しみの一つとして来るので、「来年も来るからね、よろしくね」と言って帰っていかれました。私たちは、コンサートとか観劇とかで県外に行くことはあるんですけれども、弾きにくるというツアーもオッケーなんだなと気付かされました。どんなふうに功を奏するかはわからないですけども、「みんなでピアノ物語」は、夢ホールというとてもすてきな音響のところで演奏、スタンウェイのピアノを15分間自分だけが弾くことができますよというような、そして、私たちコーディネートの立場も、ただただ弾いてくださいというのではなくて、アナウンスもし、花束も渡し、プログラムも渡しというホスピタリティあふれた演奏会ですので、そういう形で、県外の方たちにも声掛けをしてみようかなと考えています。何かまた知恵がありましたら、拝借できればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(O委員)

那賀町木沢の地下足袋王子でございます。

実は、通告をしておりました件でございますが、国道193号線の排水、台風や大雨のたびに排水ができずに、路面の舗装なんかもすぐに傷むという状況でございます。昨日ちょっとその現場を通りましたらね、まあ毎日通ってるんですけれども、ほとんど工事が終わりかけておまして。今朝も拝見すると、もう完了に近いということで。本当に早期な工事、ありがとうございました。もう答弁も何も要らないと思います。どうかこれからも、パトロール隊もおりますので、ひとつ、これからもどうぞよろしく、御協力いただきたいと思います。

そして先ほど、プロサーファーのKさんから、自然を大事にと。自然が本当に大事ななというお話がございました。ちょっと長かったですけども。実は、私の地元も、木沢の自然、特に冬の自然が素晴らしいんです。山を歩かなくても林道から樹氷が見えるんです。ぜひそれは、観光に絶対すべきなんです。遅いです。193号線は冬期通行止めなんです。12月の末から3月いっぱい全面通行止めなんです。それを解除していただいて、せめてイベントを、土曜日日曜日くらいは解除していただいて、そして那賀町さんにスーパー林道の通行許可を出していただいて、7キロ間、ファガスの森だけでも結構でございます。許可を出していただいて、冬の景色をぜひ皆さんに見ていただきたいと思っております。海はサーフィン、山は木沢の樹氷ということで、ひとつ、御要望申し上げておきます。

(P委員)

道のことについてです。今日は、県南の総合会議でございます。県南の入り口ってどこかなと考えてみましたら、旧の阿南市のイメージがあって、アピカ横の那賀川大橋を渡ったところが、阿南の表玄関のようなイメージがございましたが、私はその中で、持井橋の北詰のところは、県南の西の玄関口でないかと日頃から思っております。この周辺の櫛淵バイパス、沼江バイパスと、既に完成していただいて、近い将来は櫛淵にインターが付くということで、地域の活性化、産業の発展にも非常に繋が

ると期待しております。その持井橋の北詰の金石の道を早く整備していただいて、加茂を抜けて黒河バイパスを通過して那賀町に抜けていくという道が、那賀町から徳島に行くには一番近いかと思います。昔、細川内ダムのお話を言っている時に、那賀町から徳島まで100分道路構想みたいなのが、すごく前の話ですけど、あったように記憶しております。驚敷には、大塚の驚敷工場もございまして、既に5年前に広い広い土地を購入されて、地元の方は、いつ工場ができるのかと期待しているんですが、イベントの時に駐車場だけが今の現状で、早く工場ができたらいいなということも踏まえて、今私が言っている県南の西の玄関口、金石から加茂を通過して黒河バイパスを通過して那賀町に行くという道を、ぜひとも早く開設していただきたいと思います。2021年には、ワールドマスターズゲームズのカヌーでオーストラリアの人がキャンプに来るとかいう話も聞いておりますので、それまでに仕上げてくれたらうれしいと思います。お願いします。

次は、洪水対策の件です。やはり安心して暮らせることが一番であると思います。私の住んでいるあたりは、洪水の町で有名な町です。深瀬町に堤防も完成していただいて、加茂町と驚敷の方も今、着々と工事が進んでおり、3年後には土手ができるということですが、それより下流の既にある堤防のところで住んでいる地域の私たちは、土手が古いもので、水が漏れているというような。誤報と思うんですが、そういう話がたくさん飛んでまして、台風の際に、驚敷とか工事で土手ができると、水位が上がって、吉井の土手は必ず切れるというような伝説まで言われているような、話題で今盛り上がっています。

前回の時に、そういう不安をなくすために説明会をしていただいたらいいですよというような意見を発表しましたら、この前の7月25日に国交省の人のお世話で、地域の説明会をしていただいたんですけど、集会所にたくさんの方が集まって、非常に手厚い資料で、丁寧な説明をしていただいて、内容の濃いもので、参加者の防災意識が高まって、洪水が出たらどこに避難するとか、個々の処置の仕方みたいなのを考える機会があって、とてもよかったんです。国交省の方からも、困った点をどんどん要望してくれと、温かい言葉をいただいたんですが、何分初めての参加者が多くて、説明が非常に高度過ぎて、大学の勉強をするような、高度な手厚い内容だったので、もし次、第二段、第三段という機会をいただけるんだとしたら、まず一般市民でもわかりやすいような説明からしていただいたらいいなという声がありました。できたら、台風が県南に来たら実際にどうなるかというような調査もしていただいて、実際のデータとかを交えて説明していただいたら、もっともっと安心感が生まれるんじゃないかと思いました。

続いて、移住の件です。先ほどから、GさんとかDさんほかたくさんの方から移住の話が出ておりますが、洪水の町でもあると同時に移住の町としても、最近、加茂谷元気なまちづくり会の熱心な働きかけで、たくさんの方の移住の方が来て来ております。13組来て、45人の人口増加と聞いております。口コミで、現に来ていた人が、新しい人を呼んで来てくれるんですが、住居不足で、違うところに行ってしまうというようなことで、やはりGさんが言っていたように、空き家があっても浄化槽の問題で非常に苦心しているとの話です。那賀町では、お試しホームで非常に安い価格で、保育所を改造してそういう1年くらいのお試しホームみたいなのをしていると聞いたことがありますが、私のところにも廃校がございまして、大井小学校という廃校になった体育館が残っておりますので、私たちの地域の財産なんです、そこを何か利用して、そういうお試しホームみたいなのができないかどうかと思います。大井だけでなく、県南は他にもたくさん廃校になった建物があるので、上手く利用できないかなと思いました。

それと、もう最後に、四国八十八箇所の世界遺産の取組ということで、先ほど太龍寺の話が出たんですけど、道の駅の話です。日和佐の道の駅とか、那賀川の道の駅。いろいろすごく活気あふれて、

しているんですが、せっかく太龍寺の下に鷲敷の道の駅があるんですけど、私前にもお話をしたかもわかりませんが、場所はいいんですが、規模とか少し活性化が少ないように思いますので、ちょっとあそこも阿南と那賀町のちょうど境目なので、町を越えて何か、四国八十八箇所だけでなく、防災とかいろんな面で繋がりができるのではないかと考えておりますので、まずはそういう委員会みたいなのを何か作っていただいたら、何か糸口が見つけれられるのではないかと考えています。

(南部総合県民局長)

ありがとうございました。

皆様から意見の中で、何点か御質問もございましたけども、相当に時間が押しておりますので、1点か2点くらい、質問に対するお答えをお願いできればと思います。

(産業交流部長)

産業交流部です。

L委員さんから、林業の担い手に関して質問なり、考え方を教えてくださいということでした。委員からもお話がありましたように、作業性を優先するあまり、切り出しの際に、残存木に傷を付けたり、そんなところも見受けられるというようなことで、林業の研修と言えば、高い林業技術を伝承するような取組をしているところがあるんですけども、そういう元々の山の大切さ、自然への謙虚さ、こういったものを伝授するような、そんな高い精神性を伝える機会というのは、やはり少なくなっているのかなと私も考えております。ですから、こういった長年林業に従事してきたような、熟練の年配の方と、経験の浅い若い人たちの交流の場をどんどん作っていくことによりまして、こういった人づくりというのをやっていきたいなと考えております。

また、災害に強い森づくりというの、そのためには、作業性を優先するあまり無理な作業道を付けたり、作業道を付けるにしても地形とか地質に合った線形を設計するというのが非常に重要だと聞いております。無理なことをしますと、その影響で、それが災害に繋がる、そんなこともございますので、こういった作業道を作るにあたって、ノウハウを伝授するような研修会もどんどん開催していきたいなと考えております。

それとあと人づくりの部分なんですけども、こういった人づくりにつきましては、県の方では、徳島林業アカデミーとか、那賀高校の森林クリエイト科とかによりまして将来の森林林業を担う人材の育成に努めているところでございますけれども、今那賀町では「山武者」の方々、海部の方では「もりもり」というグループが、一生懸命林業の魅力発信をしているところでございます。こういった人たちのPRによりまして、いい人材を確保するとともに、質の高い、高い精神性を伝授できるような研修も合わせて実施することによりまして、将来を担う、災害に強い森をつくるような人材を育てていきたいなと考えておりますので、L委員さんも、大変お忙しいとは思いますが、こういった研修にも御協力いただきたく、またお願いする場面もあろうかと思っておりますので、よろしく申し上げます。

DMVのスケジュールをお聞きされたかと思っております。簡単にですけれども、現在の導入に向けてのスケジュールは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催までを目標として定めまして、車両製作に向けた準備と、駅舎の改築に関する調査・設計などを進めているところでございます。DMVにつきましては、単に住民の足というだけでなく、観光資源として国内外からの新たな人の流れを呼び込むような起爆剤として期待されておりますので、導入推進にあたりまして、委員から御説明のありました各種組織づくりなどを含めて、しっかりと取り組んでいきたいなと考えております。

(南部総合県民局長)

質問もまだあったかと思えますけども、時間も押しておりますので、後ほど個別にお答えさせていただくような形を取らせていただけたらと思えます。

それでは、管内の首長さんにも御出席いただいておりますので、首長様からも御発言をお願いできればと思います。

(阿南市長)

もう時間も大変過ぎてますので、もし町長さんの御了解をいただけたら、影治町長から、あの説明だけでも披露していただけたら。どうでしょうか。どうしても言いたいことがあったら…。やっぱり時間の制約がありますから。ぜひ影治さん、お願いします。

(美波町長)

阿南市長の方からありましたので、私の方から、代表してと言ったらあれなんですけれども、DMOのことについて、お願いをさせていただけたらと思えます。

県南地域では、この資料3の中に「四国の右下」観光誘客の推進というふうに書かれておりますけれども、そんな中で、徳島県を3つのブロックに分けると、西の方は既にDMOができています。東部についても、平成29年度、今年度中にその設立を目指しているということで、残るは南部地域となっておりますけれども、先般、阿南市長さん、今日来られている首長さん全員に、このDMOを進めるといふことについていかなものなのでしょうねということをお話しさせていただいたところ、全員から、それはいい話だということで、勉強も含めて進めていこうということになりました。

今後につきましては、県当局の御指導をいただきながら、できるだけ早い時期に県南版のDMOが設立できるようにしていきたいと。DMOは、地域の方々、いろんな団体の方々が一緒になって、観光を行うような法人ということなので、マネジメントでありますとか、先ほど委員の皆様方から出ていたいろんな観光誘客なんかを、そこが一手に引き受けて、県南全体を底上げする、そしてまずは徳島県にいろんな所から人に来ていただくという中で、やはり観光というのは、観光だけでも資源ですけれども、いろんな物との結び付き、例えば体験型が今言われておりますけれども、農業もそうですし、水産業、林業もそうです。それプラス観光というようなことも繋ぎ合わせながら、地域を活性化していこうという団体というように位置付けさせていただいて、そのようなことを県南で作っていただけたらなど、我々自治体も思っておりますので、最後、作る時には、今日来ていただいている、各分野の委員さんにお世話になるわけですけれども、県当局の御指導もいただきながら、早く作りたいたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げたいと思えます。

(副知事)

各首長の皆さん、大変御協力いただきましてありがとうございました。

皆様には、長時間に渡り、本県の将来性について具体的な御意見、御提案を賜りまして、大変ありがとうございます。また、皆様には、日頃よりそれぞれの分野で活動を繰り広げていただき、本県の発展に力強く後押しをいただいております、重ねてお礼を申し上げるところでございます。

東京一極集中、人口減少克服に向け、国を挙げて地方創生に取り組んでいるところでありますが、本県におきましては、地方創生の旗手、トップランナーとして課題解決先進県として取り組んでいるということでございまして、課題解決の処方箋を見つけて県下同じ課題で悩むところに、そういったところを普及させて、地方創生の実現に向けて取り組んでいるところでございます。そういっ

た中で、この南部地域におきましては、南部モデルをいろいろと築いていただいております、大変有り難く思っているところであります。

ちょっと時間も押しておりますので、気になったところだけお話をさせていただきたいと思いますが、ちょっと今締めていただいたところもあるんですが、まずインバウンドの問題でございます。インバウンドにつきましては、本県、県全体でありますけれども、28年度は前年度に比べて約20%、外国人が増加をしております。そして本年度につきましては、上半期になります、同じ時期に比べますと35%増ということで、国全体で2020年、2,000万人から4,000万人に上方修正しているところでございますが、やはり本県におきましても、そういった強い流れがあるところでございまして、そういった強い流れを本物にしないといけないというふうに思っているところでございます。そういう中で今、美波町長の方から、そういったお話をいただいたところでございますが、DMO、ディステイネーション・マーケティング・マネジメント・オーガニゼーションということでございまして、やはり、この南部地域の観光客をいかに増やしていくかということについて、絶えず専門的に考える組織が必要ではないかと。今、それぞれの地域におきましては、コアとなる組織といえますか、インバウンドのために活動を繰り広げていただいている方々はいらっしゃるわけですが、そういったところの組織を強化し、束ねて、さらに全体としてこの南部地域の広域観光を考えるということが重要だということで、そういったところの検討を始めていただけるということで、本県も含めて連携をさせていただきたいと思っているところであります。そういった中で、先ほどゆずの話とかグリーンインフラ、アグリツーリズムだとか、あるいは三大国際スポーツがありますのでスポーツツーリズム、いろいろあるかと思いますが、そういったことを総合的に考えていく人たちが必要ということになりますので、また皆様の御協力をいただきながら進めてまいりたいと思っております。

もう一つは、移住の話が多かったと思っておりますけれども、移住の話につきましては、情報発信があつて、相談があつて、そういった方々に体験、実感をしていただいて、さらに受入れのところがしっかりできています。受入れについても、先ほど来からお話がありますように、雇用、人材の話、あるいは家の話があつたかと思っておりますが、そういったところを一体的にやっていかなければならないというふうに思っております。まだまだだと思っておりますので、そういった意味で、また皆様の御協力をいただきながら進めていきたいというふうに思っております。学生の話がございましたけれども、やはりそういった若い世代の方々というのが、28年度には県下全体で842名の移住者がございまして、そのうち南部地域が242名と、かなりの移住者があつたかと思っております。これまた県下全体であります、842名に対して20歳代が251名と、若い方々もかなり移住をしていただいているということでございまして、若い方々もターゲットにしていくということは、大変重要なことだと思っております。都会にいる方々、あるいは、先ほど来からUターンという話がございますが、こちらから出て行く人に帰ってきてもらおうと。そういった方々、学生の方々については、もう若い時から徳島がふるさとだということを、ずっと教えていきたいと思っております。学校と連携し、行った先の大学まで含めてフォローアップをしていける、そういった仕組みができればというふうに思っているところでございます。

また、民泊などについても、シームレスで頑張らせていただいているところでございますが、更なる規制緩和ということで、この県の規制改革会議がございまして、その中では体験と宿泊を別にするという規制緩和が出てきておりますが、更なる規制緩和をいろいろと進めてまいりたいというふうに思っております。

それとあと道路の話。これは私の名前を言われたので、答えざるを得ないんですが、南側の道路については、予算については1.5倍付いているということで、かなり強力に推進しているところでござ

ございますが、南の方の海部道路からすれば、まだまだ足りないような状況でございまして、海陽町長さんおられますが、防災公園等海部道路については、かなり積極的に進めていただいているところでございまして、次のステップへの道筋が見えているのではないかと考えているところでございます。

そういうことで、皆様には、いろいろな課題を、今日全部お答えできませんでしたが、後ほどまた改めて皆様に、それぞれ皆様の御質問に対してはお答えさせていただきたいと思っております。

皆様の御意見につきましては、我々、ベクトルは同じということでございまして、そういったベクトルをいかに、時間のかかるもの、労力のかかるものもございまして、できる限りスピーディーに進めてまいりたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。本日は、大変ありがとうございました。